

Report

ダウンアンダーの国から ⑥

大貫映子

秋の風がただようパース。「どこの国にいても何か、秋風って、さびしいなあ」とちょっと沈み気味なのは、この夏があまりにも楽しすぎたからかもしれない。

この夏、青春再び(?)という勢いで海に、川に、プールに、と泳ぐことを満喫した。

オーストラリア人の水泳仲間と「ロットネス海峡横断水泳(20km)」にデュオ(2人リレー)のチームを組んで参加しよう、となってから週4~6日、2km~4kmをコンスタントに泳いでいた。週末はほぼ毎週のように「マイル・スルー」(1マイル=1.6kmのレース)と呼ばれるオープン・ウォーター水泳の大会(自然の水場を舞台にした長距離の大会)に出るか、マスターズ水泳のクラブ仲間、海で泳ぐのが好きな者同士が集まってゆっくり3~4km泳いだり。しかもたいてい早朝6時とか6時半とか。

その時間帯なら海まで車で5分、という距離に住んでいる。実は1年前は運転免許を持っていなくて、行動範囲がもっと限られていたのだ。その上はっきりいって、1年前はそれほど泳ぐことにも一生懸命でなかった。というか、週1、2回クラブの練習日に顔を出せばそれでいい、という程度。で、それでも当時はそれで自分の泳力に満足していた。うん、こんなものだ、と。

ところが今シーズンは大違い。泳ぐ回数が増える度に体がどんどん軽くなっていき、海のレースでは、自分が水面の上をすべるように飛んでいくような錯覚を何度もおこすほど。5歳の息子がおなかにいる時に週3回もマタニティー水泳クラブに通っていたことを除くと、約10年のブランクがある。どんなにブランクがあっても、また徐々にはじめそれを続けると、いくつになっても体は確実に変化が起きるものなのだなあ、と妙に毎日関心した夏だった。

さて、今年の「ロットネス海峡横断水泳」の結果だが、とてもまじめなパートナー(60歳男性のクラブメイト)に、20代の時にロットネス海峡を女性で初めて泳い

で渡り、しかも合計3回も完泳している経験豊富なレスリー・ミーニー(画家・50歳)をチームマネジャーに迎え、わがデュオチームは大成功。目標の6時間も切ったし、2人の年齢を合わせた年齢別カテゴリーでは優勝。デュオ全体でも35チーム中14位だった。

前回も触れたが、この大会は世界的に活躍するスイマーから地元の多くのレクリエーションスイマーまでが一同に会し、大人気を博している。さらにソロの部の女性の活躍は注目すべき。今年、優勝こそデイビッド・オブライアン(シドニーからの参加・27歳)というベテラン男性プロスイマーが連覇を果たしたが、3位にはパース出身のマラソンスイマーの女王、シェリー・テイラー・スミス(34歳)、5位、6位にはともに18歳、16歳の女性が入っている。総合10位までに5人が女性。その内、先の2人の10代を除くと皆31~38歳。ソロの部への女性の参加は47人中13人(28%)だから、上位10位以内に女性が50%も入っているのはホントに頼もしい。

しかし、この一面だけ見ているとわからないが、一般的には、実はオーストラリアでもスポーツへの参加はまだ男性中心なのだということを知った。「15歳の女子高校生の放課後、休日の過ごし方」に焦点をあてた学術研究によると、女子高校生は家、特に自分の部屋や居間でテレビやビデオを見たり、週末は女の子の友達の家に行き泊りにいたり……と体を動かすよりもむしろ消極的な活動を好むようだということがわかった。「ベッドルーム文化」という言葉もあるそうだ。また、共学の学校に通う女子は、オーバル(ラグビー、クリケット用などのグラウンド)が「男子学生の領域」として無言の了解事項となっていて、女性が自由に使いにくい、というコメントもあった。

「女性とレジャー」をテーマにしたバラエティーに富んだ研究報告についてはまた次回をお楽しみに。

〈おおぬき・てるこ〉

82年、日本人で初めて英仏海峡横断水泳に成功。93年7月より豪州パースに滞在。95年7月、エディス・カーワン大学人間健康学部(レジャーサイエンス)ポストグラデュエートコース修了。本年2月よりマスターコースに在籍中。